

2号機格納容器内を調査

東京電力・福島第一 2回目、映像鮮明に

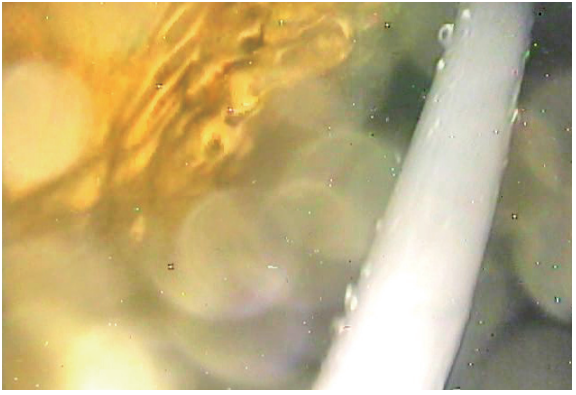
東京電力は二十六日、昨年三月の事故で、格納容器の一部が破損しているとして、福島第一原子力発電所2号機の格納容器内に耐放射線のビデオカメラを挿入し、二回目の内部調査を実施した。

2号機は原子炉内の核燃料が溶け落ち、その一部は原子炉圧力容器を貫通して、格納容器内底部のコンクリート上で冷却され固まっているものと見られている。2号機は昨年三月十五日早朝、爆発音があり格納容器内の圧力が急激に低下し、格納容器の一部が損傷したと判断しているが、どの部分が損傷したかはまだ分かっていない。

作業は約三時間行われ、最大被ばく線量は五・二九mSvだった。

ビデオカメラの先端部は十二・七cm、挿入部の有効長は二十cm、挿入部の使用温度範囲は空気中百℃、水中三十℃まで。耐放射線性は一千Gy。

二十七日には初めて同格納容器内の空間線量を計測し、最大で毎時七十二・九Svと下部に近づくほど高かった。



格納容器内部の滞留水を水面の上から撮影した映像。左上部の黄色い部分は格納容器の内側球形の壁面、右のチューブは同時に挿入した温度計の熱電対

福島事故から一年

東京電力・福島第一原子力発電所の事故発生から一年。この間、政府や東京電力、民間の事故調査に関わる中間報告書などが取りまとめられ、当時の菅直人首相をはじめ関係閣僚や関係者などへのヒアリングも実施された。一般紙や地方新聞社などからも事故直後の取材活動などを通じて、ルポルタージュも著されている。

今後、原子力安全・保安院も事故経過の情報発信などについて、様々な関係者やマスコミ、同保安院職員にもアンケート調査やヒアリングを行い、今後の教訓などに生かしていくこととしている。この際、原子力専門紙としての弊紙記者も個人的取材活動の一端ではあるが、我が国の時代の「ダーニング・ポイント」になるかも知れない昨年三月十一日(金)の地震発生からの二十四時間を記録にとどめたい。(河野 清記者)

昨日3・11の午後二時四十六分、東北地方太平洋沖地震で、福島第一原子力発電所が震度6強の揺れに耐えているとき、まもなく東京都内でも一部では震度5強の揺れを感じた。当時、原子力産業新聞の入っている事務所は、港区のJR新橋駅近くの築四十年を超える比較的古いビルの五階にあった。当の記者の机は、資料が山積みになっており、一挙に崩れ落ちそうになり、必死で両手で押さえたものの、その手をすり抜けてかなりの資料が床に散らばってしまった。

かなりの長い揺れが収まってからは、エレベーターが止まり、階段を歩いてビルの外に出た。近くのビルも含め、窓ガラスなどの落下はなかった。テレビのニュース速報で、多くの原子力発電所や首都圏の火力発電所も停止したものの、春は電力の端境期に当り、東京の中心部では停電などはなかった。

しかし、福島第一原子力発電所をはじめ、福島第二、女川、東海第二原子力発電所などは自動停止し、炉内に制御棒が計画通りに挿入されて、順調に冷却がなされているというので、安心していった。

そうなるかと、心配になるのは自らの帰宅問題だ。金曜日だったので、翌日以降の仕事のことは、とてあえず土曜・日曜日があるので、様子が見られると比較的冷静だった。

テレビでは巨大津波で、多くの船や家屋、田畑などが流されている映像が絶え間なく流れていたが、東京での津波到達予想時間が過ぎてからは、正直少し気が楽になった。

めに帰宅し、帰宅困難者は会社に泊まるよう指示が出さうのか確認してから、非常用のペットボトルとバンの靴につめて、午後十日が改まり十二日の午前〇時五十分からの記者会見に出席。原子力安全・保安院の地震被害情報【第8報】(十二日〇時三十分現在)が配布され、中村幸一郎審議官(原子力安全基盤担当)、山田知徳・原子力発電安全審査課長が福島第一原子力発電所の事故現状を説明した。

中村審議官は、福島第一1-3号機の格納容器内の圧力が上昇しており、屋の緊張もあつてか眠

私は、遠距離通勤のため、すでに当日の帰宅は諦めており、床に落ちた資料の整理などを行い、会社から提供されたハンや弁当を食べた。

その後、テレビで枝野幸男官房長官(当時)の午後九時五十分からの記者会見で、半徑三キロ避難者などを知り、首相官邸のホームページで緊急災害対策本部の発表資料などをフォローしていた。

屋の緊張もあつてか眠

3・11東京での24時間の記録 闇の中「電源車、ベント」

多くの原子力発電所や首都圏の火力発電所も停止したものの、春は電力の端境期に当り、東京の中心部では停電などはなかった。

しかし、福島第一原子力発電所をはじめ、福島第二、女川、東海第二原子力発電所などは自動停止し、炉内に制御棒が計画通りに挿入されて、順調に冷却がなされているというので、安心していった。

そうなるかと、心配になるのは自らの帰宅問題だ。金曜日だったので、翌日以降の仕事のことは、とてあえず土曜・日曜日があるので、様子が見られると比較的冷静だった。



三月二十二日午前〇時50分からの記者会見に臨む原子力安全・保安院の中村審議官(左)と山田原子力発電安全審査課長

難指示では、大熊町は完了、双葉町は避難中と説明した。

〇時十四分現在の東電管内の停電は二百五十七万戸。

【第9報】(十二日午前二時現在の記者会見が二時二十分から行われ、炉内水位は有効燃料頂部から福島第一1号機は百三十cm(二十三時四十分には五十九cm)、同2号機では三百五十cm(同二時二十分頃津波が押し寄せ、海水ポンプ、非常用ディーゼルなどが停止したことを示した。

その後、十二日の朝に取材を同僚の記者と交代して、会社にもつたが、電車はいまだに復旧していません。当協会にも一般紙の記者などから、ひっきりなしに問い合わせの電話が殺到した。事故をテレビなどで解説する専門家の紹介依頼や、日本一般的な原子力情報などについての対応に追われた。

ちょうど服部拓也・日本原子力産業協会理事長が海外出張から戻ってきたのと入れ替わりに、電車も途中までは動くようになってきたことから、千葉の自宅に戻ることにした。

その後、午後三時三十分、福島第一1号機の水素爆発は、熟睡の中、全く知るよしもなかった。

(文中のデータ等は、事故直後の混乱の中で発表されたままのものであり、その後修正されている可能性がある)

私は、遠距離通勤のため、すでに当日の帰宅は諦めており、床に落ちた資料の整理などを行い、会社から提供されたハンや弁当を食べた。

その後、テレビで枝野幸男官房長官(当時)の午後九時五十分からの記者会見で、半徑三キロ避難者などを知り、首相官邸のホームページで緊急災害対策本部の発表資料などをフォローしていた。

屋の緊張もあつてか眠

【第8報】(十二日〇時三十分現在)が配布され、中村幸一郎審議官(原子力安全基盤担当)、山田知徳・原子力発電安全審査課長が福島第一原子力発電所の事故現状を説明した。

中村審議官は、福島第一1-3号機の格納容器内の圧力が上昇しており、屋の緊張もあつてか眠

【第9報】(十二日午前二時現在の記者会見が二時二十分から行われ、炉内水位は有効燃料頂部から福島第一1号機は百三十cm(二十三時四十分には五十九cm)、同2号機では三百五十cm(同二時二十分頃津波が押し寄せ、海水ポンプ、非常用ディーゼルなどが停止したことを示した。

その後、十二日の朝に取材を同僚の記者と交代して、会社にもつたが、電車はいまだに復旧していません。当協会にも一般紙の記者などから、ひっきりなしに問い合わせの電話が殺到した。事故をテレビなどで解説する専門家の紹介依頼や、日本一般的な原子力情報などについての対応に追われた。

ちょうど服部拓也・日本原子力産業協会理事長が海外出張から戻ってきたのと入れ替わりに、電車も途中までは動くようになってきたことから、千葉の自宅に戻ることにした。

その後、午後三時三十分、福島第一1号機の水素爆発は、熟睡の中、全く知るよしもなかった。

(文中のデータ等は、事故直後の混乱の中で発表されたままのものであり、その後修正されている可能性がある)